

令和6年度 学校経営報告(学校評価報告書)

四條畷市立四條畷小学校

校長 香村 紀子

I 学校経営方針

【学校教育目標】

「一人ひとりが 輝き合う 畷小」
～じっくり考え ともに挑み 互いを認め合う子の育成～

めまぐるしく変化する時代の様相に,子どもたちが身につけるべき力はどのようなものなのだろうか。今こそ,教育の影響力をしっかりと発揮していくときなのではないだろうか。

四條畷市教育振興基本計画に掲げられた基本理念「みんなの学びが叶うまち～生涯 学び 夢 挑戦～」は,まさに今,学校だけではない「教育」がめざしていきたいものであることを再確認する。

変化の激しい流れの中で,これまでの経験や知識だけでは対応しきれないことが多くなっていくだろう。まずは,周りの状況を的確にとらえ,課題を明確にする観察や考察が重要となる。また,何かを成し遂げようとするとき,何かを変えようとするとき,常に新しいことや簡単ではないことに挑む力が発揮されることを期待したい。挑むことは,容易ではなく,また単純なことでもない。だからこそ,複数の様々な力をもった人たちと協働することを前提としていかなければならない。そのことを実現させるには,様々な力をもっていることを互いに知り,その力を互いに認め合うことから始まる。

予測不可能な社会情勢をよりよく生きていくために必要な力を,必要に応じて合わせたり,変化させたりしていくことを学校での学習活動の中で学ぶことが求められていると考える。

これまで不可欠とされた物事を処理するために必要である基礎的な学習内容を礎に,さまざまな問題などに主体的に,かつより多角的な見方を携えて関わり,解決していく子どもたちを育てていきたい。

同時に,子どもたちは様々な背景の中で困り感を感じていることも確かである。現代が抱える課題そのままだが,子どもたちに見られることは当たり前のことではあるが,不登校などの生徒指導上の課題や ICT の日常的な活用から生まれる様々な問題,学びに対する興味関心など子どもたちに見ることができる課題を一つひとついねいに取り組むことにより,子どもたちにとっても魅力ある,安心できる学校となるよう努めていく。

このような学校づくりをめざし教育活動全体で,「非認知能力」について焦点を当て,「学習」「生徒指導」などこれまで学校教育が分けてとらえてきたことを,全体像でとらえて子どもたちの内面にアプローチしていく取り組みを進めていきたい。

2 めざす学校像、子ども像、教師像（中期目標）

★めざす学校像	一人ひとりが 輝き合う 暁小
★めざす子ども像	○ じっくり考え やりぬく子 ○ 力を合わせて がんばる子 ○ すこやかな体と豊かな心を 育む子
★めざす教師像	○ とともに学び続け、互いに支え合う教職員 ○ 学ぶ意欲を引き出す教職員 ○ 子ども理解を深め、育ちを支える教職員

3 学校の現状（よさと課題）

（1）子どもたちの実態

本校は市内で最多数の児童が在籍し、南は四條畷神社、北は國中神社付近、東は清滝峠そして西は畷生会病院と非常に広大な校区を有する学校である。子どもらしい、明るく元気な様子で毎朝登校している。学力向上に取り組むと子どもたちは一生懸命取り組むが、成果として達成感を十分に感じられるほどには至っていない。同時に不登校傾向がみられる子どもたちは少なくなく、一人ひとりが様々な課題と向き合いながら、学校生活を送っている。

しかし、それでも自分や友だちのよさを見つける取組みを展開する中で、少しずつ自信をつけ友だちとつながっていきこうとしている姿が見られてきている。今後の一層の成長を期待し、教職員の取組みに成果がみられるようにしなければならないと改めて考える姿がたくさんみられる子どもたちである。

（2）子どもたちを取り巻く環境

①教育環境

歴史ある地域にあって、新たに宅地開発がなされ、ところどころに新しい住居がみられる。すぐ近くには、飯森山から連なる山々やその昔水車があったという川など四條畷郷土史カルタに出てくる場所の多くは本校の校区内にあるというほど、歴史と自然豊かな環境にある。

②地域

創立130年を超える古い歴史ある学校である。これまで多くの卒業生を送り出してきた。この歴史ある学校に対して、愛着をもつ地域の方々も少なくない。「四條畷小学校の卒業生です」と積極的に声をかけてくださる地域の方も多くいらっしゃる。本校を大切に思ってください地域の方々に支えていただき、またとても教育活動には大変協力的な地域である。

③組織（教職員、PTA、保護者）

教職員は、子どもたちの指導に温かさとしげさをもってあたり、よりよく育ちゆくことを真剣に考えながら業務にあたる。ていねいな学習指導や居心地よい学級づくりをめざし、ともに学び合うことを大切にしている。また、子どもたち一人ひとりの様子を細かに観察し、課題に向き合いながら根気よく指導に当たっている。新たな教職員を迎え、本校がめざす方向性を全体でとらえ、めざすことができるよう、教職員の関係性を高め、取り組んでいこうとしている。

PTAは、積極的に子どもたちの学校生活を支えていこうとする保護者の方々が、様々な形で協力し合うことのできる仕組みを構築して運営している。コロナ禍の終息とともに、独自の活動を展開し子どもたちがより楽しく安心して学校生活を送ることができるよう環境を整える活動を展開し今後の発展を期待するところである。また、歴史ある学校であることから、代々学校を支えてくださったPTAの方々が今も応援団として、後援会が存在している。

保護者は、学校の教育活動に協力的である。子どもたちの登校時には多くの保護者が子どもたちの様子を見ながら一緒に校門まできてくださる。その様子からも、学校と保護者とがそれぞれの役割を果たしつつ、ともに子どもたちを育て見守っていこうとする思いを感じる。

4 今年度の達成目標、具体的な方策

目標設定区分Ⅰ『学校経営』

A 今年度の成果目標		達成基準(各種調査、アンケート等)	
・「非認知能力」を高め,意欲をもって主体的に学習や活動に取り組む子どもの育成をめざす。 ・子どもたちが,安心して学校生活を送り,居心地のよい学校づくりを行う。		学校教育自己診断,児童生徒教職員アンケートにおいて,意欲をもって主体的に取り組む姿勢とそれを振り返っての肯定的意見を向上させる。 A:学校に行くのが楽しい。(児)(保) B:学校行事は,楽しい。(児) C:自分のクラスは,みんなが仲良くしている。(児)(保) D:授業は分かりやすく楽しい。(児)(保) E:授業でわからないことについて,先生や友だちに聞くことができる。(児) F:学校では,一人ひとりが大切にされている。 G:自分にはよいところがあると思う。 H:課題解決に向けて,自分で考え,自分から取り組んだ。(児) I:学校行事などで自分の役割をはたすことができた。	
B 目標実現に向けた取り組み			
項目	達成基準	結果	評価
主体的・対話的な学びを実現し,粘り強く取り組む場面設定や指導の展開	D: (児)85%以上 (保)85%以上 E:90% H:80%	D: (児)69%▲ (保)86%○ E:63%▲ H:83%○	「授業がわかる」という実感を持てなかったことが子どもたちにあったという結果は大いに授業の在り方について反省し,改善を図る必要がある。Hでは肯定的回答が多いことを考えると,子どもたちは取り組もうとはするが「わかった」実感を持ちにくかったといえる。授業の展開やその工夫と評価にいたることを「わかりやすい授業」の実施に向け改善点を教職員で検討する。
児童の自己肯定感・自己有用感につながる取り組みの推進	A:(児)83% (保)85%以上 B:(児)80% C:(児)80% (保)90%	A: (児)70%▲ (保)88%○ B:90%○ C: (児)81%○ (保)89%○	「学校が楽しい」という意味合いについて今後子どもたちと共有を図る必要があるが,目標値には届かなかった。Bのような学校行事では肯定的であり,よい学びの経験は積み重ねることができたといえる。自分の所属する集団について(C)はよい評価となり居心地のよさは一定あったといえる。 「るるる」の取り組みを通して,F・G・Iの項目の達成

	F:85% G:82.5% I:85%	F:79%▲ G:76%▲ I:78%▲	をめざしたが、この取組みに対する教職員側の迷いもあり、順調にすすめることができなかったと言えないことが、達成に至らなかったと考えられる。 取組みの効果を検証しつつ、改善を図りながら継続することでこれらの目標を達成をめざしていきたい。
--	---------------------------	----------------------------	---

目標設定区分2『学校組織の運営』

A 今年度の成果目標		達成基準（各種調査、アンケート等）	
学校の組織力の充実		学校教育自己診断,児童生徒教職員アンケートにおいて,教職員の組織についての意識向上と学校としての取組みについて積極的な認識・姿勢を向上していく。 A:学校運営の状況や課題を全教職員の間で共有し,学校として組織的に取り組んでいる。 B:校内研修で取り組むことで,「非認知能力」についての学びが進んだ。 C:「非認知能力」の育成をめざし,授業づくりに学びをいかすことができた。 D:教育活動全般にわたり,目的や意図を明確にして取り組んでいる。 E:各分掌や学年間の連携は円滑かつ有機的に機能している。 F:校内研究組織が確立し,計画的に研修が実施されている。 G:児童の問題行動等に対して,生活指導部を中心として組織的に対応している。 H:先生は,いじめなど自分が困っているとき,真剣に対応してくれる。(児) I:授業でわからないことについて,先生や友だちに聞くことができる。(児)	
B 目標実現に向けた取組み			
項目	達成基準	結果	評価
○非認知能力の向上をめざした教職員どうしの学びを深める。	A:90% B:80% C:80%	A:100%◎ B:93%○ C:83%○	学校全体の方向性等は全員で共有しながら教育活動を進めることができた。設定区分1でも述べたが,「非認知能力の育成」をめざした取組みは,教職員全体の理解をすすめることや具体的方策をもつ段階でとても悩み,うまく進まなかったことがあっ

			た。今年度は、教職員が学ぶ機会を多く持ったことで、3学期に入りようやく、全体共有が図られるようになり、次への取組みが焦点化されつつある。
○非認知能力の向上をめざした取組みを、全指導部の取組みとして全校展開する。	A:90% D:85% E:85% F:85%	A:100%◎ D:93%○ E:90%○ F:90%○	「非認知能力の向上」をめざした取組みを嘯中校区の合言葉である「るるる」に込めて、学習指導部・生徒指導部・保健体育指導部がそれぞれに取組みをすすめた。 学習指導部は、授業で実現しようと授業展開の工夫を試みた。 生徒指導部は、「いいねの花」(のちに「ありがとうの木」)の取組みを継続的にを行い、子どもたちが互いに認め合うこと、それにより自己有用感をもつことをめざした。子どもたちは喜んで取り組んでいたが、マンネリ化が見られたため、互いに関わり合ったことが「ありがとう」と伝える場面として価値づける取組みに焦点化した。少しずつありがとうの木が増えてきて、中には自分の学級の木がたくさんことを自慢している子もいる。 保健体育指導部は、例えばマラソン集会の振り返りを「るるる」を取り入れて行い、子どもたちが「るるる」から自分にあう目標設定を行い、振り返るシートを作成し、全体で取り組んだ。ただ体を動かすだけでなく、またその速さなどを競う目標でなく、「最後まで走る(ねば～)」「○周走る(やってみ～)」といった目標をもって取り組むことができた。 このように、学校教育目標に向けて全体で取り組むことができたことによって、教職員組織は充実したといえる。
○子どもたちの安心安全な学校生活を教職員等全体でつくる。	G:80% H:80% I:90%	G:100%◎ H:81%○ I:63%▲	児童の欠席状況を毎日全体共有して、個々の関わりにつなげたり、問題行動も学年団や生徒指導部中心に情報共有し対応策をとったりすることで、子どもたちのみならず教職員にとっても安心な学校づくりにつながったと考える。 Iについては、学校生活の中で一人ひとりがいいこともそうでないことも自己表現できるまでの場づくりにもひと工夫必要であることを示している。次年度に向けての課題が明確になった。

目標設定区分3『人の管理・育成』

A 今年度の成果目標		達成基準（各種調査、アンケート等）	
教職員の資質向上と学校運営への参画意識の育成		学校教育自己診断,児童生徒教職員アンケートや年度末反省において,取組みについて肯定的意見を増やす。 A:学校運営の状況や課題を全教職員の間で共有し,学校として組織的に取り組んでいる。 B:年度末反省の分析 C:今年度,四條畷小学校で働くのは楽しかった。	
B 目標実現に向けた取組み			
項目	達成基準	結果	評価
児童・生徒支援コーディネーターなどミドルリーダーの役割を全体で理解し,一人ひとりの教職員の役割とつなげて働きかける。	A:90% B:肯定的な意見や積極的な意見	A:100%◎ B:概ね肯定的であり,検討事項が明確で次の方策の提案あり。	児童生徒支援 CO という加配をいただき,組織運営において大いに活躍したことは,教職員一人ひとりの関わりを増やし,相互に成長し合う関係性が見られるようになったと感じている。どのような取組みをどういう方向性でなにを目ざしてすすめるのか,提案に対して相互に納得しながら進めることができることが教職員一人ひとりの学びになったのではないかな。 今後は,それぞれが大阪府教職員等育成指標などを参考に,キャリアや校務分掌を意識しながら,自身を成長させることを意識し,一人ひとりの教職員としての力を伸ばし,発揮できるような職場していくよう尽力する。
教職員一人ひとりの役割を明確にし,主体的に組織に働きかける仕組みをつくる。	A:90% B:肯定的な意見や積極的な意見 C:80%	A:100%◎ B:概ね肯定的であり,検討事項が明確で次の方策の提案あり。 C:76%▲	分担した役割を確実に果たしていこうとする教職員が多く,組織を支えてきた。 その役割が教職員相互の関連性をより深め,協働する教職集団であることを強化していきたい。 そうすることで,C 項目を達成するポイントとなり,教職員一人ひとりにとって自己実現をかなえる場となるよう努めていきたい。それが,子どもたちが学校を「楽しい」と思えることにつながると考える。 また一つひとつの役割が,一人ひとりの教職員の

			創造的な提案や取組みによって学校全体がより活性化するよう、学ぶ機会を多く設定し、教職員に情報発信して共に学ぶことができるようにしていきたい。
--	--	--	--

目標設定区分4『地域連携と渉外』

A 今年度の成果目標		達成基準（各種調査、アンケート等）	
積極的な学校の取組みの発信 学校運営協議会の活動充実		学校教育自己診断アンケートや小中連携会議等に関する年度末反省において、肯定的意見の向上をめざす。 A: 学校だよりなど様子を知らせるお便りの発行をすすめる。 B: 学校だよりなどにより、学校の教育活動の様子がよくわかる。 C: 学校運営協議会の活動を知っている。 D: 学校運営協議会での総括	
B 目標実現に向けた取組み			
項目	達成基準	結果	評価
学校だよりの発行により、保護者地域へ学校の取組みを発信する。	A: 学校だよりは月1回以上の頻度及び肯定的意見 B: 80%	A: 全17号の発行で保護者へアクセスすることができた。 B: 84%○	赴任1年目であり、校長が、教職員が、子どもたちが、どのような様子で学校生活を送っているのかを伝えることをめざしながら発行してきた。具体的な反応についてはとらえきれてはいないが、B項目結果から、保護者の方々には伝わっていたのではないかと考える。 今後も、学校だよりに加え様々な教職員の役割からも保護者や子どもたち、地域に向けた発信ができるよう方策を考えていきたい。
学校運営協議会の活動充実と方針の検討	C: 75% D: 肯定的意見	C: 31%▲ D: 活動内容の充実が見られたが、広報活動は必要である。	本校においては、大掃除の活動を行い、その様子を学校だよりでお知らせしたこと、あいさつの啓発ポスターを掲示したことの活動だった。なかなか周知が進んでいないことが明確な結果となった。 現段階での広報は、学校だよりや学校HPであり、その活動の報告の仕方を工夫していく必要を感じた。また、活動内容を充実させることについて検討していきたい。

5 学校関係者による評価（学校運営協議会等）

学校運営協議会が発足して、少しずつ活動が充実してきたが、保護者の認知度が低いことは課題である。活動の方法や広報の仕方に工夫が必要である。「非認知能力の育成」について四條畷中学校と共に取り組んでいることについて、研修に参加することができ「大事なことに取り組んでいる」と感じた。

学校教育自己診断結果で課題として挙げられている「タブレット端末の活用」について、授業での活用場面を見ることができ、子どもたちにとって今後一層有効活用をすすめていくことが今の時代に求められていることを実感した。

6 総合評価と次年度に向けて

子どもたちが「とにかくやってみよう」「やれるだけやってみよう」「人とつながりながらやってみよう」と思って、様々な学習活動に取り組んでほしいという大きな目標を掲げて、令和6年度をスタートした。「子どもたちが主役に」を意識し、少しずつ子どもたちの主体的な活動や姿が見られるようになりつつある。

学校教育診断アンケート等の結果から、達成に至らなかった項目は子どもたちに「できるようになった」ことの実感が持ちにくかったということにつながっているのではないかと考える。それは、教職員の取り組み方にも共通しており、教職員の取り組みが子どもたちに確かに反映することを示している。

今年度の目標をめざした取組の成果は短期間ではなかなか実感することが難しいこともわかってきた。「非認知能力」は子どもたちに必ずやつけたい力である。その育成をめざした指導についての学びや実践はまだまだこれから積み上げていく必要がある。それでも今年度は教職員全体で、一步一步すすんできたことが、次年度に向けた組織体制や指導方針につなげていくことで、もう一つ大きな成果が得られると考える。

子どもたちにとって「るるる」（「やってみ～る・ねば～る・つなが～る」）は、耳慣れた、意識し始めた指標となっている。このことを、具体的な成長の姿としてとらえ、教職員も子どもたち自身も達成感がもてるようになるまで、ねばり強く取組み続けたい。

同時に、保護者の方々にも学校の取組みについて情報提供を行い、関心をもっていただくこと、そして協力いただくことを大切にしてより一層関係性を築いていきたい。

今回のアンケート等で課題と感じられる点については、教職員との共有を図り次年度の取組みの工夫にいかし、改善が図られるようにしていきたい。